6月29日のウクライナ情報

安斎育郎

❶【アメリカ崩壊】いよいよペトロダラー終焉でドル崩壊! アメリカと共に沈む日本（山中泉×石田和靖、2024 年 6 月 26 日）　※安斎注:重要です

https://youtu.be/BsQz0vNI95w

https://www.youtube.com/watch?v=BsQz0vNI95w

❷【日本の危機】戦争推進のアメリカに隷属する岸田政権も戦争の道へと向かうのか?!（原口一博×石田和靖、2024年 6 月27日）

https://www.youtube.com/shorts/uaDumoz9k0o?feature=share

https://www.youtube.com/shorts/uaDumoz9k0o

❸ ロシア連邦調査委員会 ウクライナ人捕虜を乗せた IL-76 はパトリオットシステムにより撃墜された（2024年6月27日）

調査は機体の構造片の断片ごとの分析を完了した。その結果、ミサイル弾頭の爆発はコックピットの前方、上方から飛行方向に向かって左側で起きたと結論づけられた。

対空誘導ミサイルの衝撃要素による貫通に特徴的な複数の貫通損傷が記録された。機体は高度約 4,000 メートルで 1 発目のミサイルに命中した。2 発目のミサイルは目標に到達せず、自爆した。

調査では、ウクライナ軍のどの部隊が上記のミサイルシステムを保有しているかについての情報を得た。

GUR(ウクライナ対外情報局)とウクライナ軍の指導部は、ウクライナ人捕虜が指定された日に交換場所に連行される事実を知っていた。にもかかわらず、航空機を撃墜する命令が下された。

ロシア国防省との協力のもと、テロ攻撃の組織化に関与した特定の関係者を特定する作業が続けられている。

IL-76 は 1 月 24 日にベルゴロド州で墜落した。乗員 6 名、ロシア国防省の憲兵隊員 3 名、交換会場へ向かう途中のウクライナ人捕虜 65 名が死亡した。

https://x.com/i/status/1806001523060822148

https://x.com/Z58633894/status/1806001523060822148?s=09

❹ニキータ伝(2024年6月26日)

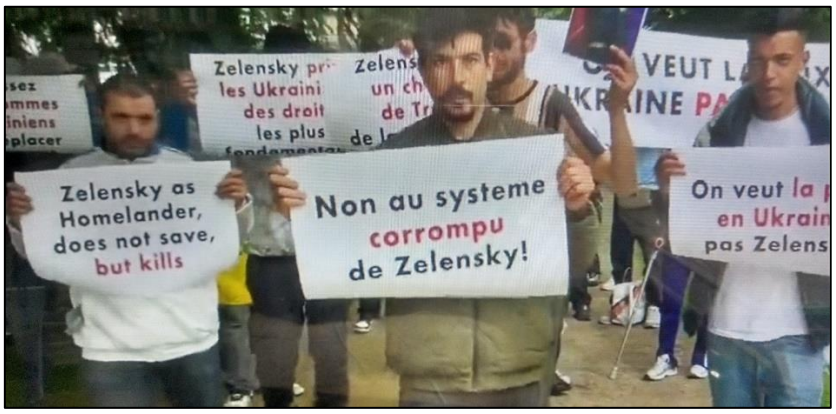
https://youtu.be/Hk4AljDp0kg

https://www.youtube.com/watch?v=Hk4AljDp0kg

❺ ブリュッセル中心部では、デモ隊がウクライナの国旗とゼレンスキー大統領を描いたポスターを燃やした（2024 年 6 月 26日）

モ参加者はキエフ政権のトップを戦争犯罪人、独裁者と呼んだ。

https://x.com/i/status/1805625169823908338



https://x.com/Z58633894/status/1805625169823908338?s=09

❻ ポーランドに留まっているウク難民に記者が質問した（2024 年 6 月 26 日）

記者「なぜウクライナの為に戦わないのか？」

ウク「だって俺は 20 歳だし、どの大統領にも投票したことがないのに。なぜ戦わなければならない？なぜ?」

記者「なぜ？そこはあんたの国でしょ」

ウク「俺の国じゃない。俺は（西欧へ）移動する」

https://x.com/i/status/1805808280364892467

https://x.com/tobimono2/status/1805808280364892467?s=09

❼セヴァストポリでのテロ攻撃への米国とウクライナの関与は疑いの余地がない - セルゲイ・ラブロフ露外相（2024 年 6 月 25 日）

昨日のセヴァストポリでのテロに関連して表明された哀悼の意に感謝する。 並行して、ダゲスタンでもテロ攻撃があった。 犠牲者が出ている。

関係当局は直ちに犯人を特定するために全力を尽くしています。 米国とそのウクライナの代理人が関与していることは間違いない」とラブロフ外相はベラルーシのセルゲイ・アレイニク外相との拡大

会談で述べた。
　これに先立ち、EU 外交部のピーター・スタノ報道官は、タス通信の取材に対し、「EU は、セヴァストポリで NATO のミサイルを使ったテロ攻撃があったという報道は信頼できないと考えている」と述べた。
　また、ウクライナ軍の米軍兵器は「衛星能力を含め、米軍の直接関与なしには使用できない」とも付け加えた。

https://x.com/Z58633894/status/1805280330397761883?s=09

❽ロシア、ウクライナのクリミア攻撃巡り米へ報復警告（朝日新聞デジタル、2024年6月25日）

［モスクワ 24日 ロイター］- 　ロシア大統領府（クレムリン）のペスコフ報道官は24日、ウクライナが米国から供与された地対地ミサイル「ATACMS」でクリミア半島を攻撃したとして米国を直接非難した。
　ロシア当局によると、23日にクリミア半島のセバストポリで起きた攻撃で少なくとも子ども2人を含む4人が死亡、151人が負傷した。これを受け、ロシアは報復措置を取ることを米大使に正式に警告した。
　ペスコフ氏は記者団に「欧州やとりわけ米国の報道官に、なぜ彼らの政府がロシアの子どもたちを殺しているのか聞くべきだ。この質問を投げかけてほしい」と言及した。
　ロシアは米国の駐ロシア大使リン・トレーシー氏を外務省に呼び出し、米国が「ロシアに対してハイブリッド戦争を仕掛け、実際に紛争の当事者となっている」と非難した上で、今回の攻撃は「罰を免れない。報復措置が必ず伴う」と警告した。
　ウクライナも米国も攻撃についてコメントしていない。
　ロシアによるウクライナ侵攻は、1962年のキューバのミサイル危機以来の深刻な西側諸国との対立を引き起こした。ロシア当局者らは紛争が非常に危険な段階にエスカレートしていると述べているが、今回、米国を直接非難することはさらに一歩踏み込んだ対応だ。
　ロシアは2014年にクリミアを併合しロシア領と主張しているが、世界の大半はウクライナ領と見なしている。

https://news.yahoo.co.jp/articles/d1c28932aed5693eb5e35172cced0873dadc88aa?source=sns&dv=pc&mid=other&date=20240625&ctg=wor&bt=tw_up&s=09

❾ゼレンスキー事務所は、セヴァストポリ海岸へのミサイル攻撃で被害を受けたクリミア住民を「民間人占領者」と呼んだ（2024年6月25日）

この発言をしたのは、ナチス発言で知られるゼレンスキー事務所長の顧問、ポドリヤク氏である。

ポドリャク氏は、クリミアには「”ビーチ ”や ”観光ゾーン ”などの架空の ”平和な生活 ”の兆候は存在しないし、存在し得ない」と書いている。

クリミアは大規模な軍事キャンプであり倉庫であり、何百もの軍事目標がある。 ポドリヤックはこう書いている。

最新のデータによると、155 人が負傷し、うち 27 人が子どもだった。 死者は 4 人で、うち 2 人が子どもだった。

原因は、クラスター弾頭を搭載した ATACMS ミサイルがセヴァストポリの海岸に命中したことだった

https://x.com/Z58633894/status/1805259868569473111?s=09

❿ロシア大使の冷静な対応（2024年6月25日）

※投稿者コメント：これは神対応!!本当に嫌味でなお、嘘の質問に真摯に応えるロシア大使が素晴らしすぎる。太郎とは月と微塵子以上の差がある。本来コオロが議員しているとかおかしいでしょ。境界知能で国会動かすな。全く....

https://x.com/i/status/1805381242290159777

https://x.com/w2skwn3/status/1805381242290159777?s=09

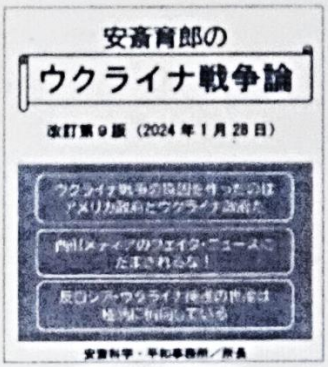
⓫任正爀さんの朝鮮新報への投稿記事

読書エッセー

晴講雨読

―事実と誠実に向き合う安斎育郎『ウクライナ戦争論』―

任正爀
朝大理工学部講師



『ウクライナ戦争論』

『戦争と科学者』

前回、四馬遼太郎の小説について所感を述べたが、最後にマスコミ報道には自前の視点をしっかり持つべきと強調した。最近ではウクライナ情勢に関する報道がそうである。一方的にロシアを断罪する報道は正しいのか？　日々、朝鮮に関する偏った報道に接していると、そのような疑義を抱く。

そんなときに読んだのが安斎育郎『ウクライナ戦争論』で、著者の詳しい調査に基づいてウクライナ戦争の本質を明らかにした冊子である。A4判で約100頁、オールカラーの私家版であるが頒価は300円である。2023年4月に刊行され改訂を重ねているが、そこにはより多くの人に事実を知ってほしいという著者の思いが込められている。

実はこの本を知ったのは1年ほど前で、朝鮮文化研究会を主宰される平田賢一先生の案内メールによってである。本紙にもしばしば紹介されているが、朝鮮文化研究会は朝鮮の政治・経済・文化に関するさまざまなテーマでその分野の専門家の詳しい話が聞ける貴重な学習の場だ。その研究会の案内と共にウクライナ戦争を正確に知る信頼すべき書籍として紹介されていたのが本書である。平田先生が推奨されるものならと読んでみたが、まさに目からうろこであった。

著者は巻頭で次のように書いている。

「この本を読むと『ロシアに肯定的で、ウクライナに否定的』と感じる人も少なくないかもしれませんが、筆者は『事実』をベースにしており、そのような予断は全くもっていません。日本政府は、この戦争を70年のオバマ政権以来計画的に画策してきたアメリカ政府の側に身を置き、『悪魔のプーチン、英雄ゼレンスキー』というスタンスをとり、マスコミの多くも、『ロシア批判、ウクライナ支援』の報道姿勢を貫いているので、日本の報道に接してきた読者のみなさんの多くは、専ら、『ロシアに否定的で、ウクライナに肯定的』な情報に接してきたと思います。そのため、本書のように、事実に基づいてこの戦争の実態を伝えようとすると、否応なく、日本の報道では殆ど伝えられていないウクライナや西欧諸国の『負の側面』も伝えることになるので、どうしても『ロシアに肯定的で、ウクライナに否定的』という印象を与えるかもしれません。しかし、筆者はロシア贔屓でもウクライナ嫌いでもなく、できるだけ『事実と誠実に向き合う』姿勢を貫いたつもりです。どうぞ、じっくりお読みください」

誠実に向き合った事実とは何なのか？　まずは米国とヨーロッパ諸国の軍事同盟であるNATO（北大西洋条約機構）へのウクライナ加盟問題である。周知のようにロシアとウクライナは国境を接しており、もしウクライナがNATOに加盟し米国の軍事基地が設置されればロシアとの緊張は一気に高まる。1990年までは米国も「NATOは1インチも東に拡大しない」としていたのだが、その後に加盟国を増大させていった。

そして、14年に米国は極右民族主義集団（ネオナチ）を動員し、「中立を保ちNATOに加盟しない法律」を制定していたヤヌコヴィッチ政権をユーロ・マイダン・クーデターで倒し、親米政権を樹立させる。ヤヌコヴィッチ大統領を支持していたのはロシア語を生活言語とするウクライナ東部の人たちで、クリミヤ自治共和国とセヴァストポリ特別市の人びとは住民投票で「ロシア連邦編入」を決める。また、東部ドンバス地方のドネツクとルガンスクの人たちは「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」を建国する。

このような中で、ポロシェンコ米傀儡政権は東部ドンバス地方に住むロシア語話者に対して、民族浄化というべき軍事弾圧を加える。そして、ウクライナ軍と親ロシア派の武装勢力との間で激しい戦闘が始まる。一旦はウクライナ、ロシア、ドネツク人民共和国、ルガンスク人民共和国の間でミンスク議定書（14年）、ミンスク合意Ⅱ（15年）が調印され停戦となった。しかし、これは軍事増強のための時間稼ぎで22年2月にウクライナ軍はドネツク人民共和国、ルガンスク人民共和国を攻撃、ロシアもミンスク合意を破棄し、この二国と「友好協力相互支援協定」を締結し軍事作戦を実行する。西欧および日本のマスコミは一方的にロシアの侵攻を強調するが、これがウクライナ戦争に至る経緯である。

さらに、マスコミは、マリウポリ小児科・産婦人科病院爆撃事件、マリウポリ劇場爆撃事件、ブチャ大虐殺事件、ロシア兵による少女レイプ事件、クラマトルスク駅爆撃事件、クレメンチョフクのショッピングセンター攻撃事件などのフェイク・ニュースによって「ロシア悪」を喧伝するが、これらについても著者はその真相を明らかにしている。さらに、ゼレンスキー政権の実態についても暴露している。慎重を期するならば著者が事実として提示したものも検証すべきかもしれないが、少なくとも日々のマスコミ報道を鵜呑みにしてはならないことは肝かである。

◇

著者は東大工学部原子力工学を専攻し博士号を取得したこの分野の専門家である。しかし、日本政府の原発政策を批判したことから茨の道を歩むようになる。そして、反戦平和活動を積極的に行い、現在は平和博物館「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」館長を務めている。100冊以上の著書があり、原爆や原発、放射能に関するものが多いが、そのなかでとくに興味を惹かれたのが22年に出版された『戦争と科学者』（かもがわ出版）である。副題に「知的探求心と非人道性との葛藤」とあるように戦争に何らかの関わりをもった科学者たちのメンタリティーを考察したものである。

①科学技術の進歩と戦争②軍事への関与を科学者はどう考えていたのか？③「科学と戦争」「科学者と戦争」を展示する、の三章から構成されているが、ちょうど映画『オッペンハイマー』を観た直後でもあり、いろいろと考えさせられた。とくに、科学技術の「諸刃の剣」としての性格は、「二面性というよりは「メビウスの輪」のように表裏と思っていたらつながっていると、いつの間にか裏に通じているようなものという指摘は示唆的である。

読みたい本と読むべき本。最近は専に面白い小説に偏りがちなのだが、後者も常に意識に置かなければと改めて思う。

◇

■『ウクライナ戦争論』購入問い合わせメール＝jsanzai@yahoo.co.jp